

平成22年11月16日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



左は昭和25年の新入生1年G組の集合写真です。全員、新制中学校から進学したはじめての土浦一高生です。戦後まだ間もない頃で服装などまちまちです。写真をよくご覧ください。前列中央の担任（中田左内先生）の両側に女生徒が写っています。この年、本校に、はじめて6名の女子が入学したのです。これは本校にとって画期的なことでした。

旧制中学から新制高校へ

戦後の昭和22年当時、茨城県には県立中等学校として中学校九（水戸・土浦・下妻・鉾田・麻生など）、高等女学校一八（水戸・土浦・下館・石岡・大子など）、農学校一二（水戸・石岡・真壁・笠間・取手など）、工業学校四（水戸・下館など）、商業学校二（水戸・湊）、水産学校一（湊）の計四六校で、その他に市町村立と私立の中等学校が数校ずつあった。昭和23年4月に発足した、新制高等学校は民主主義教育の原則に則って、学校差の撤廃や入学試験の緩和、勤労青年への門戸解放等によって、高等教育の機会均等を実現させようとするものであった。男女共学の実施も、新制高校の大きな特色であったが、制度として定着するにはかなりの時間を要した。

『茨城県教育史』（茨城県教育会・昭和35年刊）には「この問題に關しても、新制高等学校再編成協議会において慎重な審議が行われた結果、昭和二十四年度の新入生から実施することにし、原則としては、男女共学を本体とするも、施設その他地域の事情により、画一般に実施することをされた。」と述べられているように、最初から消極的な姿勢がみてとれる。同書は続けて「新制高等学校の発足した昭和二十三年度においては、普通課程においては次のような状況であった。

男子のみの学校…二六校
女子のみの学校…一九校
男女共学の学校…四校

しかしながら、当時は従来の男子に対しての中学校、女子に対しての高等女学校という観念が強く、男女共学に対しては、従来の男女性別に対する儒教的思想が強く支配していたので、相当社会の注目するところとなった。男女共学を原則として生徒募集を行ったものの、実情はおのずから二つの方向に分れてくるようになった。一つは同一地域に既に旧

制の中学校と高等女学校とがあつて、男女別の教育が行われていたところにあつては、従来の伝統から男女の共学は一般に不振であつた。これに対し、同一地域に唯一の旧制中学校をもつていたところでは、男女共学が成功を見るようになってきたのである。例えば全学年にわたつて男女共学が行われた新制高等学校は小瀬・笠間・麻生・潮来・江戸崎・真壁・谷田部等であつた。日立・太田・水戸・土浦・下館・下妻・水海道・電ヶ崎・鉾田等の如く旧制の中学校が第一、旧制の高等女学校が第二の高等学校に再編成されたところにあつては、大部分男女別に分け、極めて少数の男子または女子が一方に在学している現象である。」と、新制高校への移行期数年間の推移を分析している。

初の女子一高生は六人

昭和25年、本校創立以来初めて女子六名（のち一名転入で七名になる）が入学した。これまで女人禁制であつた教室に可憐な女生徒がいるということ自体、女子から隔離されて学校生活をしてきた当時の上級生たちにとっては俄かに信じ難い出来事であつたに違いない。休み時間、女生徒のいる教室の廊下には見物の上級生が群がったほどである。

翌26年には三十二名の女子が大挙して一高に入学した。学校側はその対応に苦慮した。五、六名ならともかく、三十人を超えるとトイレや更衣室など女生徒の環境を整備しなければならなくなった。体育などの授業も女子を視野に入れたカリキュラムに改めなければならぬ。これまで男子ばかりを相手にしてきた教師にとつて、女子の指導に戸惑いもあつた。こうしたことから本校では、やっぱり男女共学は無理だという気運が強まり、一転して女子の一高への志願を抑える方向に動きだした。昭和27年に入学した岩崎（小野）惇子氏（高7回）は『進修百年』に「パイオ

ニア時代の女子学生たち」と題して一高への入学について次のように記している。「土浦市内一のマンモス校、土浦一中からは七人ほど一高進学希望の女子がいた。しかし受験票提出の期限ぎりぎりまで、高校の意図をうけて教師が一人一人説得することにわたつた。それも生徒指導に熱心な教師ほど一生懸命、親も呼んで進学校の変更をすすめた。私の場合も例外ではなかつたが、変更するにも行きたい高校がないので、そのまま受験した。」こうした一高の方針はしばらく続けられたようで、このあとしばらくの間、女生徒は数人程度に止まっている。

水戸一高では二人

水戸一高でも同様な状況がみられた。昭和25年4月、初の女生徒二名が入学した。このことは地元新聞にも報じられるなど大きな反響を呼んだ。『水戸一高百年史』（昭和53年刊）には「しかし、大騒ぎされるほどの気分が持ちは二人にはなかつた。一人は当時を回顧して、『私は水戸の学区内にいましたから、水戸市内の高校を受けるつもりでいたところ、中学の先生が、水戸一高へ行け、とおっしゃるので入ったわけです。女生徒が一人もいない学校であるとは全く知りませんでした。前もって分かっていたら受験しなかつたかもしれません。だから入学式の時に二人だけと知った時は相当のショックでした』と入学の動機を語っている。女生徒に対する校内の反響は大きかつた。すでに二人の入学以前、その報に接した生徒数名が、教師のもとへ陳情に行き、七〇年の伝統の名においてその入学に反対するといふ一幕もあつた。」と当時の様子を記している。

ともあれ水戸一高でも男女共学がスタートし、次年度には十三名、三年目の27年度には二十名の女子が入学するようになった。しかし、昭和30年代前半には一ケタに減少するなど、共学への歩みは一進一退の状態が続いた。

表1 水戸一高・土浦一高の年度別女子入学者数（昭和25～40年度）

年度	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
水戸一	2	13	20	9	10	12	9	3	7	2	8	14	22	25	36	36
土浦一	6	32	10	6	4	6	4	17	13	22	12	27	32	39	34	42

「水戸一高百年史」、土浦一高・学校要覧より作成

表2 土浦一高の女子入学者数の推移

年度	昭25	30	35	40	45	50	55	60	平2	7	12	17	22
女子入学者数	6	6	12	42	57	68	83	104	128	138	139	117	114
入学者総数	350	371	373	445	361	360	404	423	425	381	365	327	325
女子割合(%)	1.7	1.6	3.2	9.4	15.8	18.9	20.5	24.6	30.1	36.2	38.1	35.8	35.1

土浦一高・学校要覧より作成

再び本校に話を戻そう。表1に示したように水戸一も土浦一も女子が全体の割合を占めるまでには制度発足後十数年を要しているが日本の高度経済成長に合わせるように、昭和40年代になると、年々五十人を超える女子が入学するようになり(表2)、土浦一高はもはや男子の牙城ではなくなった。数の上だけでなく、学校生活の各分野で女子の活動が目覚ましくなった。生徒会で活躍した高15回の中村三喜氏は『進修百年』への寄稿「伝統と創造」のなかで「男女生徒が一緒にフォークダンスをするには抵抗がかなりあった時であるが、むしろ女生徒からの強い働きかけで実現したと記憶し

年々華やぐ土浦一高

先の『水戸一高百年史』で「本校で一定数の女生徒が在籍し、曲りなりにも男女共学と呼べる状態に達するには、十年余の歳月を要したのである。」と述べている。さらに同書では「本県当局は、発足当初から男女共学には必ずしも積極的姿勢を見せなかった。二七年二月の地元紙一面トップに「男女共学制度好ましからず、県下では全面的廃止の公算大、西野教育長突如声明を発す」と四段抜き見出しの記事が掲載され、読者を驚かせたことがあった。」と県教育委員会の共学否定の方向性を指摘している。ちなみに、男女共学を実施して数年を経過した昭和29年度の入学志願者の状況を、『茨城県教育史』の資料から拾い出してみよう。まず女子の一高系への志願者数は、日立一4、太田一2、水戸一9、鉾田一46、土浦一5、竜ヶ崎一16、下館一9、下妻一16、水海道一27、などで結構ばらつきがみられる。一方、日立二、太田二、水戸二、土浦二、竜ヶ崎二、下館二、水海道二など二高系への男子志願者は皆無であるが、石岡二10、取手二42、結城二13、古河二14のように一部共学校も出てきている。

ている。」と女生徒の積極性を述べている。音楽部や演劇部など文化クラブはもとより、テニス部やバレエ部など運動部にも女子が進出するようになった。昭和45年に入学した橋本(柴沼)順子氏(高25回)は女子五人以上を集めて一高に女子バスケット部を創設してい



少数精鋭時代の女子剣道部(昭和58年)

女生徒の活躍が目立つ文化祭



フォークダンス(高21回) 昭和43年

るし、同じく高25回の佐久間(吉田)満里子氏は弓道部での活動を「一年の秋の県南新人戦には初めて結成したチームにもかかわらず、団体・個人ともに入賞することができた。」との一文を『進修百年』に寄せている。45年のインターハイでは、ヨットの女子S級で、高23回の友部美恵子・鈴木敦子両氏は全国優勝している。昭和50年代から60年代にかけて女子の数は増え続け、女生徒の割合は二割を超えるようになり、59年のインターハイでも、ヨット部女子がFJ級で全国優勝を果たし、62年には女子剣道部が団体及び個人でインターハイに出場するなど一高女子の活躍が目立った。平成期に入ってから女子の数は増え続け、遂に全生徒の三分の一強が女子で占められるようになった。彼女たちにとって、もはや男子校の中の女子という意識は殆どない。校内にまともな居場所すら無く、肩身の狭い思いで一高生活を送った半世紀前の女生徒たちには考えられないほど、今の一高は女子にとって大変居心地の良い学校になっている。ところで、最初に女子が入学してから今年でちょうど六十年経つ。男女共学の歴史は創立百余年の半ば以上を刻んだ。この間、女生徒たちは少しずつだが着実に、土浦一高に自分たちの活動の場を広げてきたのである。蛇足的だが、平成19年度の本校の女子大合格者を羅列してみたい。お茶の水6、津田塾15、東京女子15、日本女子11。これらの数字をどう見るかについては論評を控えたい。ついですが、冒頭の集合写真に写っていた男生徒の一人であった筆者には、六十年後の今、一高祭や野球応援など事あるごとに、校歌《亀城一千の健男児》を、初めは少し躊躇いながらも、やがては拳を振り上げ屈託無く声高に謳う本校女生徒が、新たな《我が校風を輝かせ》ている頼もしい担い手に思える。